

蜂須賀家のルーツを探る

蜂須賀小六正勝の生い立ちとその生涯

正勝は野盗、野伏の頭領だったのか

2024年6月17日

とくしま学博士

徳島城博物館ボランティアガイド

坪内 強

蜂須賀とは 空海伝説に出てくる黄蜂の塚から由来する。

【あるところに黄蜂が群生して、人々を悩ませていた。空海はこの蜂を符縛し、塚に埋めたため、「蜂塚」と言われ、これが「蜂須賀」の由来であるという。】

黄蜂 ⇨ スズメバチ



蜂須賀家菩提寺 はちすか弘法蓮華寺



蓮華寺は、818年（弘仁9）、弘法大師が熱田神宮の神託により創建したと伝えられている。

この地には毒蜂が多く、その害を受ける人が多かった。そのため、弘法大師が法力をもって蜂を封じ塚を築いた。それ以後、害はぱたりとやんだと言う。これによりこの地を蜂須賀にしたと言われている。

約2万㎡にも及ぶ広い境内左手には、蜂須賀小六正勝の顕彰碑と蜂須賀城址の碑が立っている。

蓮華寺には、蜂須賀正勝、家政親子の位牌や墓碑も残っている。



蜂須賀城跡の石碑・蓮華寺入口



蜂須賀小六正勝公舊宅跡の石碑・圓龍院

蜂須賀城は現在の蓮華寺の南西約100mの所にあった。ここには城跡を示す石碑がある。

蜂須賀城は東西・南北共に200mに及ぶ大規模な(4ヘクタール)方形城館で、屋敷(お城)の周りには堀・土塁があった。

織田信長の生まれた勝幡城



勝幡城は単郭構造の方形居館（平城）で、その規模は「**東西四十八間、南北七十間**、大手口東西二重堀、四方に惣堀有、惣構の外**南北百二十間、東西百十四間**（『尾陽雜記』）*4.3ヘクタール 蜂須賀城と同規模か？

城のすぐそばを流れる日光川、三宅川、領内川などの水運が利用できた。

織田家が勢力を伸ばすことができたのは、経済力豊かな津島の商人を支配できたからだとされている。

この地で財力をつけた織田信秀は、今川氏から那古野城を奪い取って拠点を移し、その後勝幡城は廃城となった。

尾張蜂須賀家

尾張群書系図などに依ると、蜂須賀家が阿波に移った後も、蜂須賀小六正勝の弟と称する勝秀はこの地に残り『尾張蜂須賀家』の家祖・蜂須賀花木氏となり、蓮華寺領を管理したとされている。

この『尾張蜂須賀家』は、江戸時代も尾張藩から苗字帯刀を許されている。

蜂須賀氏とは

- 美濃国に隣接する尾張国海東郡**蜂須賀郷**（愛知県あま市蜂須賀）を領した**国人**で、**川並衆**であったともいう。
- 正勝の曾祖父・**正永の代**までは尾張守護の**斯波氏**に仕えていたが、斯波氏が衰えたため、父の**正利の代**には美濃国の**斉藤氏**に従ったといわれる。
- 『**藩翰譜**』（はんかんぷ）によれば、**正利**は蜂須賀**百貫**の知行を得て、**北尾張の被官**（国人領主）を務めたという。
- 『**蜂須賀家記**』では初めは**濱姓**を名乗り、次に**斎藤姓**を、蜂須賀村に二百貫の知行を得て、**蜂須賀姓**にしたとある。
- **正勝**の代になって蜂須賀氏は**信長**の配下に属して、歴史の表舞台に登場する。正勝は**秀吉の与力**として活躍し、その子の**家政**と共に**秀吉直臣**となって、阿波一国を治める大名へと立身した。

蜂須賀正勝は野盗野伏の頭領だったのか

誤解は何故生まれたか

- 小瀬甫庵おせほあん『**太閤記**』
- 「或時**信長**卿老臣を呼聚(よびあつめ)評議し給う(中略)**藤吉郎**を召、密かに御談合有けるに、**当国には夜討強盗を営みとせし其中に、能兵共(よきつわものども)多く候**。(中略)其中にても、武名も且々人に知られんは、**稲田大炊助**(おほひのすけ)、**新七**、**同小助**、**蜂須賀小六**等也。上下五六千に可及候」
- 小瀬甫庵『太閤記』は寛永三年(1626)の成立で、秀吉の死後約三十年後のことである。
- 藤吉郎が「**この国には夜討強盗を営みとしている人々の中に優れた武士たちが多い**」と言い、その中に**蜂須賀小六**の名が挙げられている。これにより正勝が夜盗の頭領として捉えられることが定着し、講談や小説などで脚色されて広まっていった。

もう一つの誤解 矢作橋での秀吉との出会い

- この逸話は江戸時代後期、寛政の頃に出された栗原柳庵編『**真書太閤記**』が初出である。
- 後にその内容を絵で示した『**絵本太閤記**』が出版されるに及び、その頃から広く一般に浸透していったものと考えられる。



小六と日吉丸 矢作橋の出会い 絵本太平記

尾州海道郡の住人蜂須賀小六といえる者あり。

乱れたる世の習いにて、近隣の野武士をかたらい、東国街道に徘徊し落武者の武具を剥ぎ取り、人家に押入財宝を奪い、その手下に属するもの一千余人、勢い近国に聞ひける。

或夜手下余多引具し岡崎橋を渡りける。

彼日吉丸この橋の上によく寝て前後も知らで有りけるを、小六通りざまに日吉丸が頭を蹴りて行き過ぎる。

日吉丸目を覚まし大きに怒り、汝なに奴なれば無礼をなすや。

我幼しと言えども汝が為に辱めをかうむるいはれなし。我前に来り詫びを付して通るべしという。

小六驚きて立寄り見れば十二、三歳の小児なりければ心に甚だ恐れ思わざりを無礼を謝しきとは、汝何国いかなる者の子なろうや。

幼き身として不敵の一言感じるに余りあり。我に随い奉公すれば厚く恵みて召したまうべしと尋ねける。

日吉丸しかしかの事を物語り元より行くべき方もなく仕ゆべき主人もなし。お主に従い仕え奉らんといふ。小六大いに喜び..... (後略)

蜂須賀小六正勝 彦右衛門

- 蜂須賀氏は**初め斯波氏**に仕えたとされ、戦国時代に彦助正氏・彦左衛門正成(正昭)父子の代に家名を上げたという。この彦左衛門正成(正昭)の二男・**正利**が**小六正勝の父**である。
- 正利以前の系譜には異説もあるが、ともかく正勝は**大永六年**(1526)、尾張国海東郡蜂須賀村(現愛知県美和町)に**正利の子**として生まれたのは間違いない。
- **濃尾国境付近の土豪**として**木曾川筋の川並衆を掌握**。斎藤道三、織田信賢のぶかた、織田信清、織田信長に仕え、桶狭間の戦いにも参加。
- **永禄9年**(1566年)、美濃国において秀吉の手で果たされた**墨俣城**の築城に前野長康らと協力した土豪衆(稲田大炊助、青山秀昌、長江景親、梶田景儀など)の1人として、**正勝は弟・又十郎と共にこれに加わった**。秀吉が城の守将とされた後も与力として付けられて、斎藤方を凋落する案内役として活動した。
- 正勝はこれらの功で、信長により50余村と500貫を褒美として与えられる。

- 永禄11年（1568年）、近江六角攻めでも秀吉与力として箕作城みつくりじょう攻撃に参加。同年、信長に従って上洛した。
- 永禄12年、秀吉の代官として京に留まって警備にあたり、二条城が火災に見舞われた際には速やかに鎮火したので、足利義昭は正勝に桐の紋の入った羽織を褒美として与え、家紋としての使用を許した。
- また、信長も正勝の手柄を伝え聞き、尾張春日井郡三淵郷に5,000石を褒賞として与えた。
- 元亀元年（1570年）、越前天筒てんづつ山城・金ヶ崎城攻め、金ヶ崎の退き口で活躍。
- 姉川の戦い、近江横山城の攻略で秀吉と従軍して功をあげた。横山城が秀吉に任せられると正勝は城代となった。

- 長島一向一揆との戦いにも従軍したが、この戦いでは弟・正元を失った。
- 天正元年（1573年）、浅井氏の滅亡後に秀吉が近江長浜城主となると、正勝には秀吉の直臣として長浜領内にも食邑しょくゆうが与えられた。
- 天正5年（1577年）から始まった中国攻めには、秀吉の譜代衆となった息子・家政と共に従軍した。
- 天正8年（1580年）4月24日、広瀬城（長水城）を正勝と家政で攻略、この功により、家政には月毛の名馬を、正勝には長水城が与えられて、初めて城主となった。

- その後、播磨を平定すると、秀吉は黒田孝高の助言に従って姫路城を本拠として改修し、**正勝にも播磨龍野城5万3千石**を与えた。
- 天正10年（1582年）4月、**備中高松城の戦い**において、秀吉は正勝と孝高に安国寺恵瓊と協議させて、毛利氏と誓紙せいしを取り交わして**和睦を成立**させ、山崎の合戦に臨んだ。
- 合戦において正勝は秀吉本隊の一員として戦い、稲田植元と共に戦功を上げる。

- 天正12年、正勝が豊臣家中における筆頭格の老臣となる。
- 正勝は大坂城のすぐ側である楼岸に新しい邸宅を与えられた。
- 所領の龍野は家政が取り仕切っており、前年夏以前にはすでに家督を譲っていて、正勝は蜂須賀家当主を隠退する。
- 四国征伐の前に、秀吉は戦勝の暁には正勝に阿波一国を与えようとしたが、これを辞退し、代わりに所領は子の家政に与えられることを希望した。
- 四国征伐の戦功により、阿波一国（17万3千石）は家政に与えられ、龍野城は福島正則へ与えられた。
- 天正14年、正勝は病に臥せるようになり、ほどなく、楼岸の邸宅で死去した。
- 享年61歳。

蜂須賀小六正勝公顕彰碑

蓮華寺の山門手前にある。現在もその命日である5月22日には、碑前にて同公の法要が執り行われる。この碑は昭和2年（1947）に建立、除幕式当日は蜂須賀茂韶・正氏父子の臨席のもと盛大に執り行われた。



碑文

時は人を作り人また時を作る。應仁以来元亀天正の間に起れる群雄中ここに蜂須賀正勝あり幼名を鶴松と呼び、小六を通称とし足利高経より出でて七代の蔵人正利を父とす。四男二女の長子に生れて資生の英邁智略は夙に郷党推戴の衆望を負い織田信長に招かれて、屡々戦功あり五百貫の禄を興へられ名を彦右衛門尉と更む。信長の旗を京師に樹こむとする。発祥の第一歩は美濃の洲股城を以て最も難事とせしが、羽柴秀吉これに富り正勝その功を完ふせしむ、爾来秀吉の麾下に属して肝胆相照し形影相に伴い戦国乱離の波瀾曲折に応じて、苟くも秀吉の動くところ正勝のあらざるなく、秀吉の中国探題として姫路に居城せし時、正勝また龍野城主として五万三千石を興へらる。偶々信長の兇変は天下の形勢を一変して秀吉の大をなすに従つひ正勝ますます帷幄の謀将となり戦陣の雄将となり加えて内外の功に誇らざる恬淡の性格いよいよ重く用いられ深く許される。

戦国時代初期 尾張近隣国 国司、守護 勢力図



尾張 城配置図



蜂須賀氏のルーツ

蜂須賀氏の祖は、江戸時代の寛政重修諸家譜に依ると清和源氏足利流の一族である**斯波氏**といわれる。

足利尊氏に従って名を上げ、室町守護名門の礎を築いた高経の七代孫正則が、尾張国蜂須賀郷に住み蜂須賀を称したとされる。

蜂須賀氏はその昔、**尾張国海東郡蜂須賀郷**（愛知県あま市蜂須賀）を領した**国人**で、**川並衆**であったともいう。

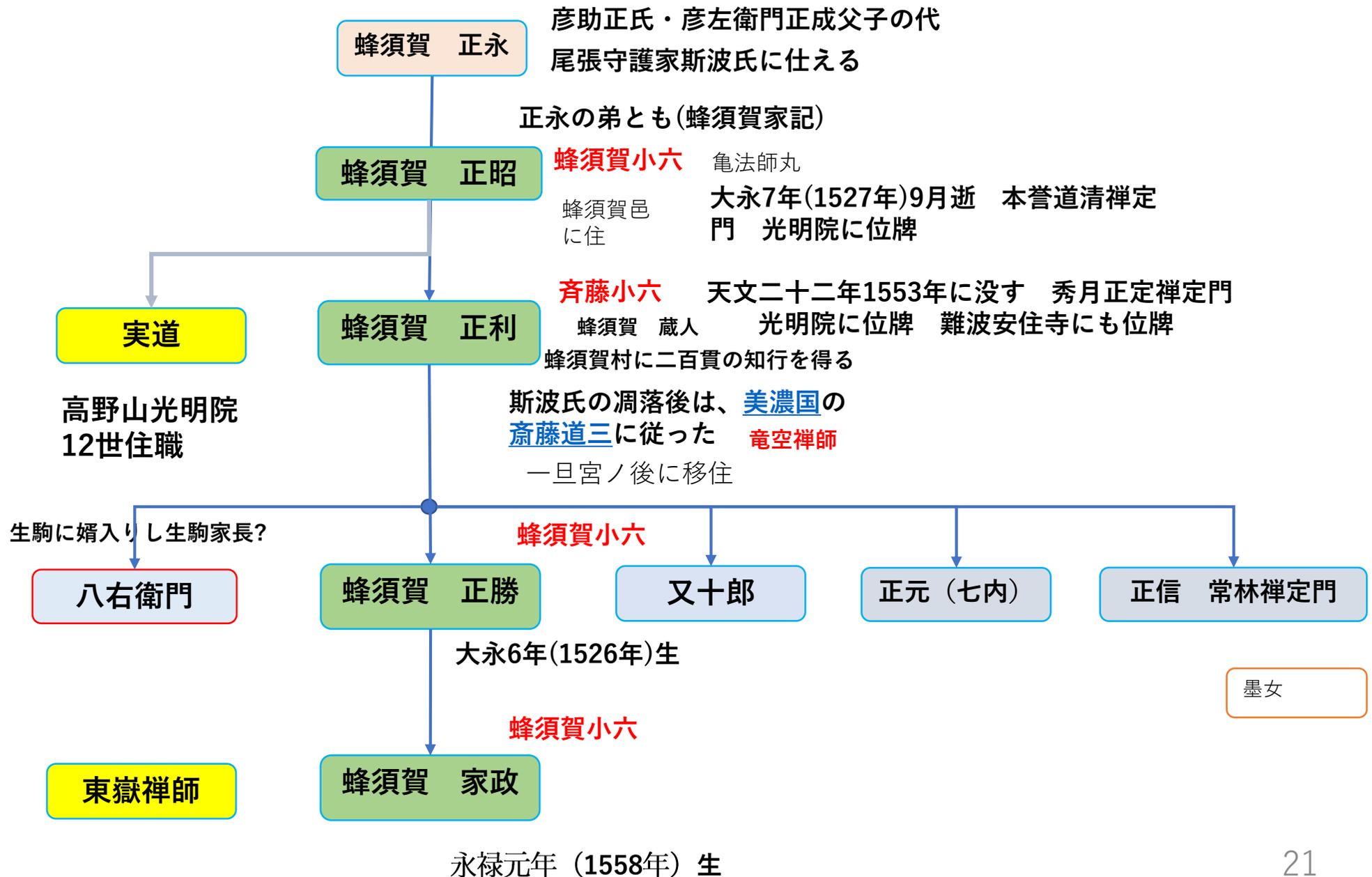
正勝の曾祖父・正永の代までは**尾張守護の斯波氏**に仕えていたが、斯波氏が衰えたため、正勝の父の正利の代には蜂須賀郷に200貫を領し、**美濃国の斎藤氏**に従ったとされている。

その昔、蜂須賀城の前で行き倒れていた旅人を正勝の父、正利が助けたところ、のち美濃の齋藤道三から贈り物が届くようになった。

あの時、恩返しを堅く約束して去っていった旅人は当時の松波庄九郎、のちの道三自身であったという逸話がある。

- 史書に記された蜂須賀家のルーツ
- 蜂須賀氏のルーツを知るためには『蜂須賀家記』、『蜂須賀氏系譜』、『寛政重修諸家譜』、『阿淡年表秘録』などが有名。
- 正利、正勝までは史書により異なっているが、まずは森本文庫に収められている『蜂須賀氏系譜』を試みる。

蜂須賀家系図



蜂須賀氏系譜

- 姓は源氏
- 蜂須賀家の紋 鉄線または八重菊を用いる
- 正勝侯の時将軍義昭公より桐の紋を賜う然るに秀吉公の紋なるゆえ柏の丸を用いる
- 至鎮公難波の役の比(ころ)蛇の目を用いる。その後卍紋に改む。

正昭公

- 蜂須賀小六と云う 此れより前不詳
- 大永7年9月5日逝く
- 本誉道清禅定門と号す
- 紀州高野山光明寺に位牌有り

夫人

- 和州宇知の郡の住 坂合部出羽守次房 同兵倍大輔 又曰く伊賀衆の住 坂寄左近 この三家のうちの女なりと云う
- ある説曰く恵林禅尼者始め斯波家に有りて名を片野と云う
- 懐胎して正昭公に入りて正利公を生む
- 故に公は斯波氏と云う
- 尾州海東郡今言う海部郡なり 蜂須賀の邑 四に分る
波村、中橋村、日比村、蜂須賀村
- 蜂須賀村の内 亦 花木 中嶋に分る

正利公

- 蜂須賀小六後藏人と云う 蜂須賀邑に生まれ母未知
- 始め濱と云う 齊藤山城守道三に属して齊藤小六と云う 蜂須賀の邑を領す200貫 伝不詳
- 蜂須賀の邑より一旦宮ノ後の邑にも移住すと云う
- 一説 正利公出家ありて名龍空禪師と云う 二十歳にて還俗(げんぞく)
- 天文22年(1553年)癸丑年2月15日逝く
- 秀月正定禪定門と号す高野山光明院に位牌有り
- 一説摂州難波安住寺にも位牌有り
- 或いは云う始め濱氏 中 齋藤道三に属して齊藤小六
- 後織田信長に属して蜂須賀藏人と云う

屬織田信長公稱蜂須賀藏人

夫人

氏未知光明院ニ元秀慶本禪定尼永祿十二年廿日トアリ月
ナシ又高堅宗養禪定尼天正十二年十五日是又月ナシ此二
牌ハ前後ニ夫人ノ位牌ナラシ青山傳曰正勝公ハ前ノ夫人ニ生レ
賜正元公ハ後ノ夫人ニ生賜并正信公於墨女ハ前ノ夫人ニ後來ル
青女名シヤクト云ニ出生ト云ク

付載 兵家茶話ト云各ニ天野信景ノ説ト左ノ系トヲ載ス

信濃宮略系

宗良親王 後醍醐第三皇子 興良親王 無品遠江宮

三

尹良親王 字津華宮

良王 称源姓住尾津嶋

神王 後称大橋和泉守信重
母大橋修理亮貞元女

良新 津嶋社男
称北室

貞常 大宇助津嶋神主
実大橋貞元男

貞廣 大橋中務大輔
重名大郎約言

貞安 大橋和泉守有子孫
蜂須賀正利妻

女子 大永至生小六利政

實道法印

多病ニテ出家野山ニ住假名常林実名実道ト云
大永六丙戌年二月廿七日光明院住職享祿二己丑年十一月
四日遷化又法印權大僧都実道大和尚ト号

夫人

- 氏未知
- 光明院に元秀慶本禪定尼永禄12年(1569年)20日とあり月無し
- 又高岸宗養禪定尼天正12年(1584年)15日これまた月なし
- この二牌は前後に夫人の位牌ならん
- 正勝公は前の夫人に生まれ賜う 正元公は後の夫人に生まれ賜う
- 正信公及び墨女は前の夫人に従来る青女名はシャクに出生と云う
- 天野信景の説では小六正利の妻は大橋和泉守貞廣(定広)の娘
- 大永6年(1526年)に小六利政(正勝)が生まれる

実道法印(高野山光明寺第12世住職)

- 多病にて出家
- 野山に住み假名 常林 実名 実道と云う
- 大永六年二月二十七日 光明寺住職
- 享禄二年十一月四日 遷化(せんげ)ス
- 法印権大僧都実道大和尚と号



高野山 光明院 蜂須賀家代々の遺骨を納め、蜂須賀家の大きな位牌が並んでいる。

徳島城から移された襖絵が素晴らしい。



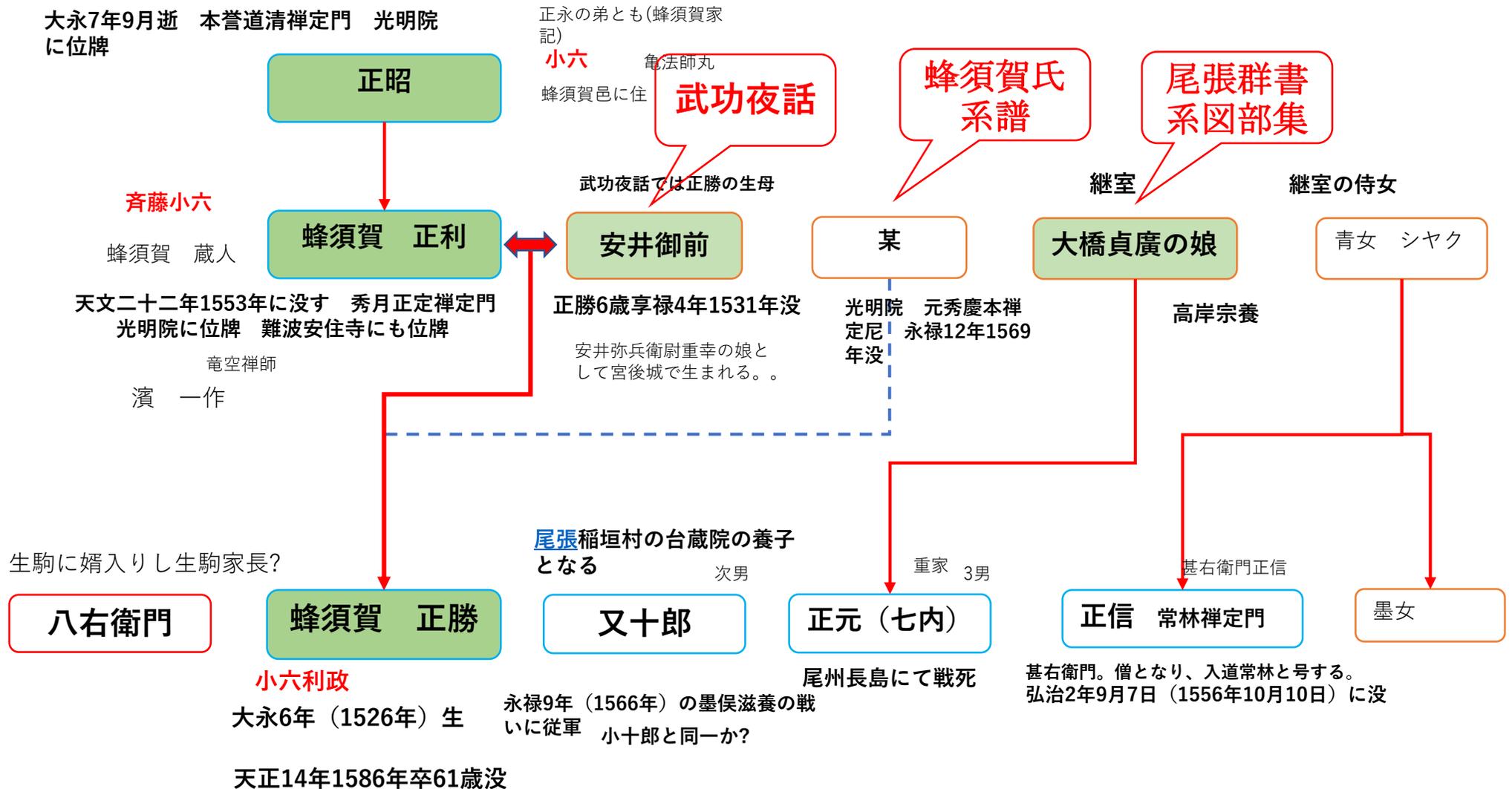
正勝公

- 大永六年蜂須賀の邑に生 母公者氏未知 初名鶴松
- 齊藤小六利正と云斎藤山城守道三に属す
- 弘治二年四月二十日 その子義龍父道三を殺 故に公蜂須賀の邑に帰り 尾州岩倉の城主織田伊賀守信知の配下に属し蜂須賀小六利政と云う
- 又その後同国犬山城主織田十郎左衛門信清の幕下に在
- 永禄五年九月武功に依りて信長公から禄五十貫を加て秀吉公の謀主となる
- 又濃州五十余邑を謀て信長に属す 故五百貫の地を加賜
- 命に依て名を彦右衛門尉正勝と改
- 同十二年又尾州春日井郡三淵村にて五千石の地を加賜

正勝の母は？

- 正利の妻であり正勝の母は、「尾張群書系図部集」には継室の「大橋定広の女」とあり「蜂須賀家記」に依ると「大橋定広の女」以外の某氏とされている。(大橋氏は津島の豪族)
- 「蜂須賀氏系譜」に依れば光明院に位牌の有る元秀慶本禅定尼とされている。
- また一説に依れば、正室または側室の安井御前であり正勝が6歳の時に亡くなったという。
- その正勝の生みの母とも言われている「大橋定広の女」や「安井御前」とはどの様なお姫様だったのだろうか。

正勝の生母について



正利の継室の父「大橋定広」について

- 津島湊は、古くから交通の要衝であり、津島神社の門前町、貿易港としても栄えた土地であり、織田家が、信長の祖父信定、父信秀の時代より重要視してきた商業地である。
- 尾張国津島には、「四家・七名字・四姓」の土豪よりなる南朝方「十五党」があり、四家の長は奴野城主大橋氏で、戦国初期の当主は重一であった。
- 大橋定広は、重一の父(叔父)とも重長の祖父とも伝わる。
(定広の姪の豊姫は絶世の美女で、家康の祖父清康の継室になっている。)
- 正利が津島の長である大橋家から継室を迎えたのは間違いがない。
- 蜂須賀正利が一角の人物であった証と言えるだろう。
- 大橋氏は後の重長(重定)のとき、尾張国清洲城主織田氏と領地を争う。
- 重長は、信秀と抗争を続けたが、ついには信秀の女、信長の姉の蔵を嫁として迎え、やがて信秀に属するようになる。
- 津島十五党は、織田家の中核を担う勢力となりその財力で織田家を支える。
- 織田信秀にとって、大橋家の女を継室にした正利は目障りであったに違いない。

蜂須賀正勝の生母？ 安井御前

- 蜂須賀正勝は、1526年、蜂須賀城主・蜂須賀正利(200貫)の長男として誕生。

(200貫とは→約50町→約15万坪の領地)

一貫 = 1000文(匁) = 2石 戦国時代は貫 秀吉検地後 石

- 母は宮後城主・安井重幸(安井弥兵衛、安井弥兵衛尉重幸)の娘・安井御前とも言われている。
- 母は正勝が6歳の時に亡くなり、正勝は継室の「大橋定広の女」に育てられた。
- 蜂須賀正勝は1553年に、父正利と共に織田信秀に追われて蜂須賀村を出て、江南市宮後町(母の故郷・宮後城)に移り、美濃の斎藤道三に仕えたとされる。

安井屋敷(宮後城)と蜂須賀正勝

- 天文22年(1553年)正勝(26歳)は父、正利と共に安井御殿に移り住む。(道三が長良川の戦いで没したのは1556年)
- 『蜂須賀氏系譜』等に、正利が一時宮ノ後に居住したと記されている。
- 東岳禅師が曼荼羅寺で仏門に入ったこと、
- 家政が曼荼羅寺で勉学に励んだこと、
- 家政が、宮後八幡宮や曼荼羅寺の正堂を寄進、再建した事

などから、正勝そして家政が宮ノ後の安井屋敷に居住していた事は間違いないと思われる。

宮ノ後八幡社



宮後八幡社は、寛永元年（1624）蜂須賀家政が再建した。
古い棟札に「奉建立八幡宮御本社並釣殿拝殿共二大旦那ハチスカノ庵様、寛永元年9月28日」とある。

蜂須賀家政は、漸く老境に達した69歳の時、故郷の宮後の地が忘れがたく、八幡社の本殿、釣殿、拝殿を造宮寄進した。

現在、八幡社に残っている本殿は、構造手法から見て、家政の寄進したもので、400余年前の建物である。

曼荼羅寺正堂（国指定重要文化財）



幼少期の家政が市内にある曼荼羅寺の塔頭 梅養軒（現 本誓院）で昌運上人を師と仰いで学問修業をおこなった縁で寛永9年（1632）に御所紫宸殿を模して曼陀羅寺正堂（本堂）を再建した。

本誓院には家政の使用した文机や位牌が残されている。

安井屋敷とは

武功夜話

尾州河内川並衆蜂須賀党の覚え

ここに尾州上の郡丹羽郡稲木荘前野村、乾方八町先宮ノ後村なる処あり。安井屋敷内に寓居仕る勇侠蜂須賀小六なる者あり。

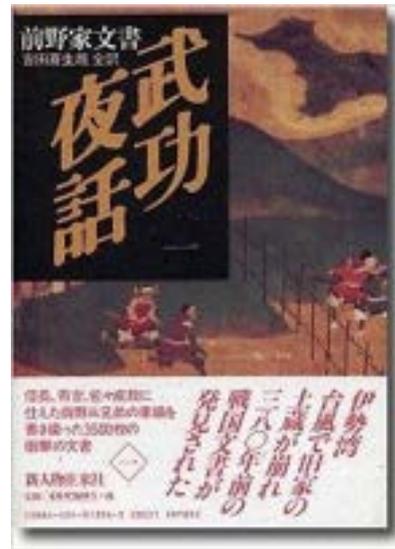
この家元は、尾州海東郡蜂須賀村なり。(略) 親蔵人の代、織田信秀様と隙あり。

蔵人亡き後蜂須賀の郷退去、お袋様御在所なる尾州上郡宮後村安井弥兵衛の家へ退れ、寓居罷りあり候ところ (後略)

安井屋敷(宮後城)

南北80有余間(153M)、東西60有余間(117M)、乾(西北)の方位には大竹林、馬隠し場、辰巳(南東)の御土居内に八幡社今にあり。約5000坪

誠に広大堅固の構えである。



『武功夜話』は、前野家文書と呼ばれる古文書群の中心的な家伝史料である。

前野家文書は、愛知県江南市の旧家吉田家に、先祖であると称する前野氏の歴史をまとめた書物として伝わっているもので、1959年（昭和34年）の伊勢湾台風で蔵中に入水し、中が露見して見つかったと称する。

前野家の縁者で豊臣秀吉に仕えて大名にのぼった前野長康（坪内光景）や、前野家と関係の深かったという蜂須賀氏、生駒氏などの後の大名家、そして生駒屋敷に出入りしていたという織田信長や豊臣秀吉の青年時代。

桶狭間の戦いや墨俣一夜城の築城といった蜂須賀家に関わりのある重要な事件について、類書には見えない情報を伝える。

偽書とも言われるが、貴重な資料であることには間違いがない。

- その後、**斎藤道三**が1556年に息子の**斎藤義龍**と戦って敗死すると、美濃を去って尾張岩倉城主・**織田信賢**(のぶかた)に仕えた。
- 1557年頃、宮ノ後城から約3kmと近い、**小折**(愛知県江南市)の武家商人・**生駒家の食客**となった。
- 此の頃、**信長**は愛妾の生駒吉乃に信忠、信雄、徳姫を産ませている。
- そこで、蜂須賀正勝は「**川並衆**」と言う独立勢力を束ねて行くようになる。
- 1554年に養子の**東獄**、1558年に実子の**家政**が誕生しているので、正室の**大匠院**(松、まつ)と結婚したのも、宮後城に移った頃とも考えられる。

- その後、**犬山城主・織田信清**と渡り歩き、1564年に織田信清が織田信長に攻められて、尾張から追い出されると、**織田信長**に仕えたと言われている。
- 永禄9年(1566年)、有名な**墨俣一夜城**で秀吉の与力となり、
- **信長**が稲葉城を落として岐阜城を築城した永禄10年(1567年)に**岐阜城下**に移住した。
- **秀吉**が、39歳に**長浜城**の城主となった1575年の頃、蜂須賀正勝(48歳)は秀吉から城下に住むことを許され、伊勢長島に1000石、近江浅井郡に600石の合計1600石の**領主**となった。

安井御前と蜂須賀正勝そして浅野長政、更に豊臣秀吉

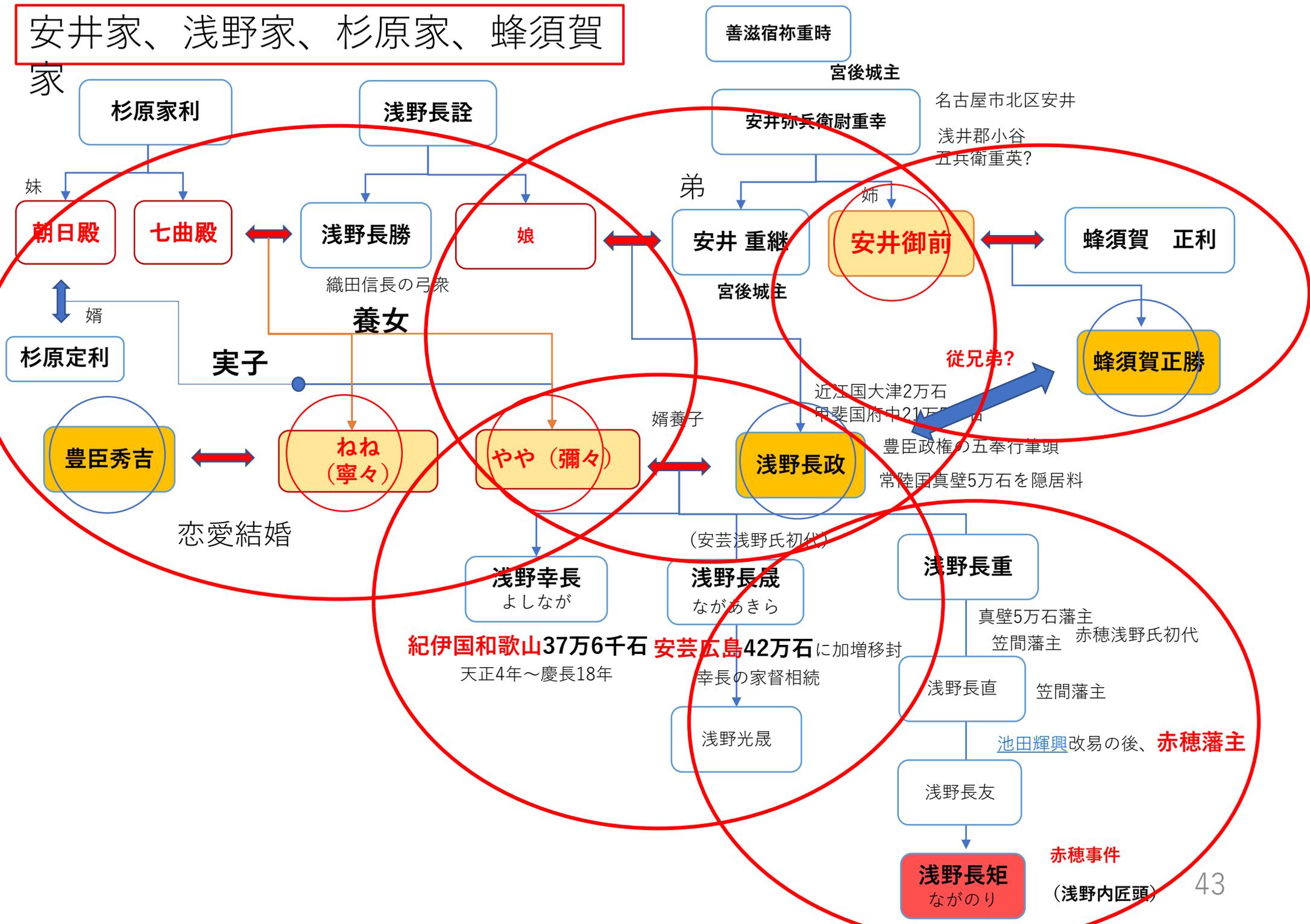
- 「安井御前」の父は尾張宮後城主・安井重幸。
- 常陸真壁藩初代藩主・浅野長政(浅野長吉)は、安井重幸の長男の安井重継(安井御前の弟)と、母(浅野長詮(ながあきら)の娘)の間に生まれる。
- 父・安井重継は、甥である蜂須賀正勝に家督を譲り、安井家は蜂須賀家へ吸収され、安井屋敷は蜂須賀屋敷と呼ばれるようになる。

浅野長政、ややの婿養子となり秀吉の姻戚となる

- 長政は、織田信長の弓衆をしていた叔父・浅野長勝(母の弟)に男子がなかったため、浅野長勝の娘・やや(彌々、長生院)の婿養子として浅野家に迎えられた。
- のちに浅野家の家督を相続する。養母は七曲殿。
- この浅野家には、浅野長勝の養女となっていた、ねね(おね、寧々、のちの北政所、高台院)がおり、木下藤吉郎(後の豊臣秀吉)に嫁いでいる。
- ややとねねは、七曲殿の妹朝日殿と杉原定利の娘で子の無い浅野家の養女となっていた。
- その縁で、浅野長政は、豊臣秀吉にもっとも近い姻戚として、織田信長の命で豊臣秀吉の与力となった。

安井家、浅野家、杉原家、蜂須賀

家



生駒氏とは

- 生駒氏は藤原良房の子孫で、灰や油の商いと馬借で富を築き、**小折城**と呼ばれる家屋敷を構えた尾張国丹波郡小折の土豪。
- 武家商人として飛騨国から三河国まで広範囲の商圈を有し、犬山城主・織田信清に属していた。
- その後、夫の土田弥平次が戦死したため実家に戻っていた生駒家宗の娘・類（**吉乃**）が織田信長の側室となったことにより、**信長に仕えた**。
- 屋敷は遠方から多種多様な人の集まる場所となっており弾正忠家の**信長は生駒氏の財力と情報力を求めて近づいた**と言われている。
- またその時**生駒家の小間使**だった**秀吉**が、信長に仕えるきっかけとなったと言われている。
- 生駒家宗は1556年死去。**子の家長は信長に馬廻り**として仕えた。
- **家長の女ひめは蜂須賀家政に嫁ぎ、三男 生駒善長は徳島藩中老、阿波生駒家の祖**となる。

- 家長は、はじめ犬山城主織田信清に属し、その後信長に仕えている。
- 永禄元年(1558)信長の尾張国内統一の浮野合戦や文禄3年の桶狭間の戦いで軍功をあげる。
- 続いて永禄4年、信長と斎藤龍興が戦った森部の戦い、翌年の信長の小口攻めと犬山攻め、姉川攻めと数々の戦いに従軍し手柄をたてている。
- 永禄3年のころには、信長との親密さを増し、「馬一匹を使って尾張の國中、諸荷物を自由に運搬し商ってよい。」との「國中往還認可の書状」を受けた。
- 本能寺の変後は、信長の次男織田信雄に仕え、1300貫文を領した。
- 小牧・長久手の戦いでは長島城代をつとめる。
- 信雄が追放されると浪人し、豊臣秀吉に仕え天正18年、秀吉の小田原征伐に従軍。
- 秀吉死後、徳川家康の四男松平忠吉の尾張入府の案内を任された際、そのまま尾張国に留まって家臣となり、1954石を知行した。

讃岐生駒氏

- 高松藩主となった生駒氏は、もと土田氏という。
- 土田氏は、美濃国可児郡土田に住んで明智家に仕えたといわれる。土田の城は、可児川が木曾川に合流する地点からやや上流左岸にあった。
- 土田親重（元亀元年〔1570〕没）が、祖母の実家でその兄弟にあたる尾張国丹羽郡小折（愛知県江南市）の生駒豊政の養子となったことから、生駒へと苗字を変えたものである。
- 親重の兄妹には織田信秀の正妻で、信長・信行（勘十郎信勝）の生母の土田御前が居る。
- 親重の子には土田弥平次（信長の室、生駒「吉乃」の最初の夫。）や生駒雅楽頭親正（初代高松藩主）がいたとされる。
- なお、生駒豊政は大和生駒に発したという藤原姓の土豪であるが、その孫娘が吉乃であって、土田御前とは又従姉妹に当たる。

一生駒雅樂頭先祖道樹ハ元来美濃國土田村之佳人也織田朴岩信康ニ仕テ武功有故ニ朴岩ノ命ヲ以テ豊政之嫡子トシテ生駒氏ヲ讓ル所也是故ニ彼家ニ於テ豊政ヲ以テ先祖トシ其後生駒平藏道壽之長子主殿助婿トシテ彼是ニ對テ當家

女子
如何某外平治ノ婦ス後織田右所之
一永録九年寅五月十三日卒號
久菴桂昌大禪定尼菴小折久昌寺
信忠 三徳中將
信雄 後一徳内大臣
号帝真

讚岐生駒氏の先祖は土田村に住み織田信康に仕えていたが、武功があり、信康の命で生駒豊政の嫡子として生駒氏を名乗る。

吉乃の夫 土田弥平次とは

土田御前の兄弟とも甥とも言われる**土田弥平次**は、「**明智（三宅）弥平次**」（明智秀満）ではないかとの説がある。

吉乃の夫であった土田弥平次は「**明智城の戦い**」で死亡し、吉乃が織田信長と結ばれた。その同じ時に明智弥平次が同じ「**明智城の戦い**」で破れて逃走したとされて居る。

実は土田弥平次は死亡せずに、光秀と共に逃亡し、後に明智光秀の娘婿となり、明智弥平次そして、明智秀満と名乗る事になったのだろうか。



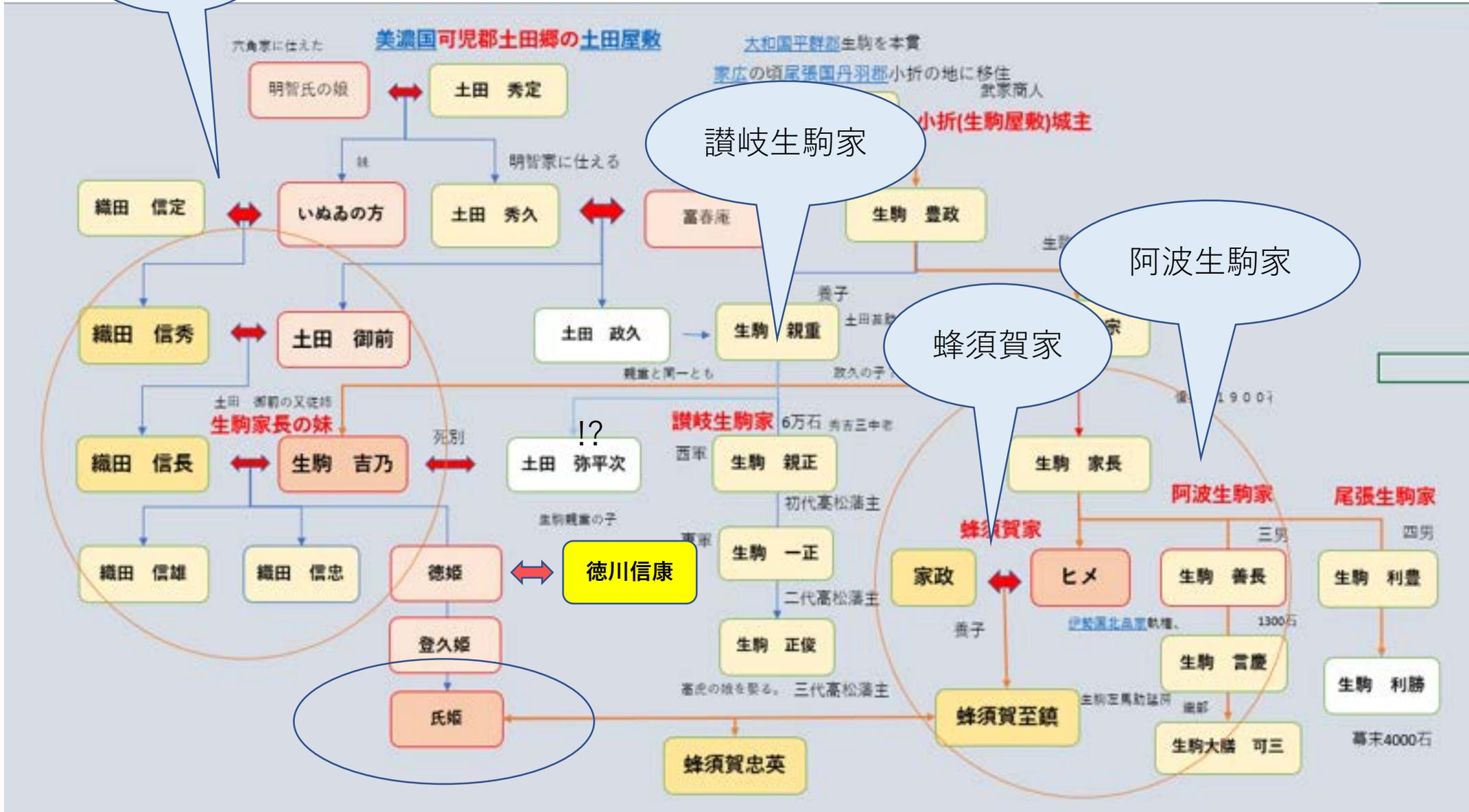
織田氏 土田氏 生駒氏 蜂須賀氏 相関係図

織田家

讃岐生駒家

阿波生駒家

蜂須賀家



正勝の義兄弟

前野長康 前野将右衛門 前野但馬守長康

- 名は坪内 光景。通称は将右衛門。元は尾張国松倉城の領主である坪内氏の当主・坪内勝定の嫡男で、別名を坪内長康とも言われている。母は生駒右近妹
- 蜂須賀正勝と義兄弟の盟があり、永禄9年（1566年）、墨俣一夜城の築城に協力し、豊臣秀吉に臣従。
- 小牧、四国、小田原、文禄の役に従軍。
天正13年（1585年）播磨三木城から出石城に5万3千石で移封。
- 聚楽第構築の作事奉行を勤め、天正16年、後陽成天皇の行幸の前駆を勤める。
- 文禄4年（1595年）秀次事件に連座し、嫡男前野 景定と共に中村式部少輔（一氏）預りとなり、駿河府中にて自害。

稲田植元 (いなた たねもと)

- 天文14年（1545年）、尾張**岩倉城主・織田信安の家臣**・稲田大炊助（おおいのすけ）貞祐（掃部助とも）の三男として誕生。母は尾張勝幡城主織田信秀の家臣・前野彦四郎の娘。室は織田信安の孫。
- しかし父・貞祐は、清洲の織田信長と内通しているという讒言により信安の命によって天文22年（1553年）3月27日に**切腹**させられた。植元は9歳の頃に父の朋友であった蜂須賀正勝に預けられた。
- その後、正勝とは義兄弟の契りを結び、共に織田信長の家臣・羽柴秀吉に仕えた。
- 家政が阿波を拝領した際、植元は、蜂須賀氏の筆頭家老という形で入国したが、稲田氏は単なる家老ではなく客分であったといわれる。
- また、稲田氏は約1万石（のち1万4千石）という大名並みの知行地を与えられており、阿波北部を中心に領した。
- 最初の脇城の城番の際には譜代の家臣88騎を龍野から連れ、阿波でも新規家臣を多く召し抱え、家臣は約500名となった。

戦乱の世、正勝を支えた正妻の「まつ」

- 正勝の正妻である大匠院「まつ」。
- 「まつ」の出自は不詳であり謎に包まれている。
- 蜂須賀家記など多くの古文書では、父は尾張の豪族益田持正とされている。尾張群書系図部集でも益田の女と記されている。
- しかし、武功夜話では秀吉の家来の三輪吉高の女であり宮後八幡社々家三輪若狭の妹とされている。
- また、伊勢の関家に由縁の真清田神社・真清田（益田）持正の女との説も一部にある。

伊勢国の北畠氏に仕えていた関正康・長重父子が、熱田神宮の力を借りてこの地に移り住み、真清田神社の神官となった。
一宮城は社領を守る為に築いたといわれる城。

北畠家を追われたまつは、正勝との結婚前一時伊勢の関家に依っていた。

関氏と尾張一宮真清田神社

- 関氏は平重盛の子孫といわれ、伊勢国の北畠氏に仕えていた関正康・長重父子が、熱田神宮の大宮司の力を借りて真清田荘の地に移り住み、真清田神社の神官となった。

真清田神社

- 尾張国一宮である真清田神社は古来多くの社領を有したが、それらは「真清田荘」として荘園化し、平安時代末には水田130町(約1.1km四方)であった。
- その後天正12年(1584年)には大地震で社殿が崩壊し、1591年には秀次の検地のイザコザから豊臣秀吉が神人達の職を廃し散逸させ、社領も没収されて社勢は衰えたという。その後江戸時代に再興した。

尾張一宮城と関氏

- 一宮城は**真清田神社の神官・関氏**が社領を守る為に享禄年間（1528～32）に築いたといわれる城で、関康正、長重、長安の三代の居城となる。
関成重 成正とも
- 長安は、織田信長に従い近江桜馬場、小谷城攻めに加わり、天正十年（1582）の武田氏攻めでは、恵林寺僧衆成敗の奉行に任命された。
- 本能寺の変の後は織田信雄の家臣になる。
- 関長安は小牧・長久手の合戦(1584年)では秀吉に従い、岩崎城（日進市）攻めの後、池田恒興や森長可と共に長久手で戦死する。
- 関長安はこの時一宮城を捨て、一時美濃へ退去した。
- 一宮城は、徳川連合軍の拠点として、牧野康成が入城。
- その後、不破広綱が入城する。
- 1590年（天正18年）織田信雄が改易になると、不破氏も尾張から退去し、一宮城は廃城となる。

真清田神社



真清田神社は、平安時代、国家から国幣の名神大社と認められ、「尾張國一之宮」として、国司を始め人々の崇敬を集めました。

御祭神は天火明命（あめのほあかりのみこと）で、鎌倉時代、順徳天皇が多数の舞楽面（ぶがくめん・舞楽に用いられる仮面）を奉納しました。

その舞楽面は、重要文化財として保存されています。

蜂須賀氏系譜 正勝夫人松

夫人
 益田太郎左門女名松一 幼名匠正勝公逝ル後秀吉公ヨリ河州日置村ニテ
 茶料トシテ千石ヲ賜其後濃州關ヶ原ノ役ノ後家康公ヨリ尾隠
 岐守津田小平太御使トシテ同賜慶長十六辛亥年四月廿三日一説ニ有
 阿州ニ於テ逝ス大近院殿光室玄桂大姉ト号與源寺葬同十八癸
 丑年三月至鎮公ヨリ日置村千石ヲ本多上野介追上納
一説ニハ益田惣右門トシテ尾州ニテ三千石ヲ領スト云々益田藤右門ハ大近
 夫人ノ兄ニテ嶋八左門兄ナリ同内膳宮内ハ弟ナリ豊後ハ宮内子也且夫
 人ノ異兄ニ織田五郎左門ト云有隱居シテ名金吾ト云其子ヲ蜂須賀与三右門
 ト云其子源太夫其子八藏時故有テ忠英公ヨリ堀尾平十郎養子遣サレテ其
 家ヲ嗣

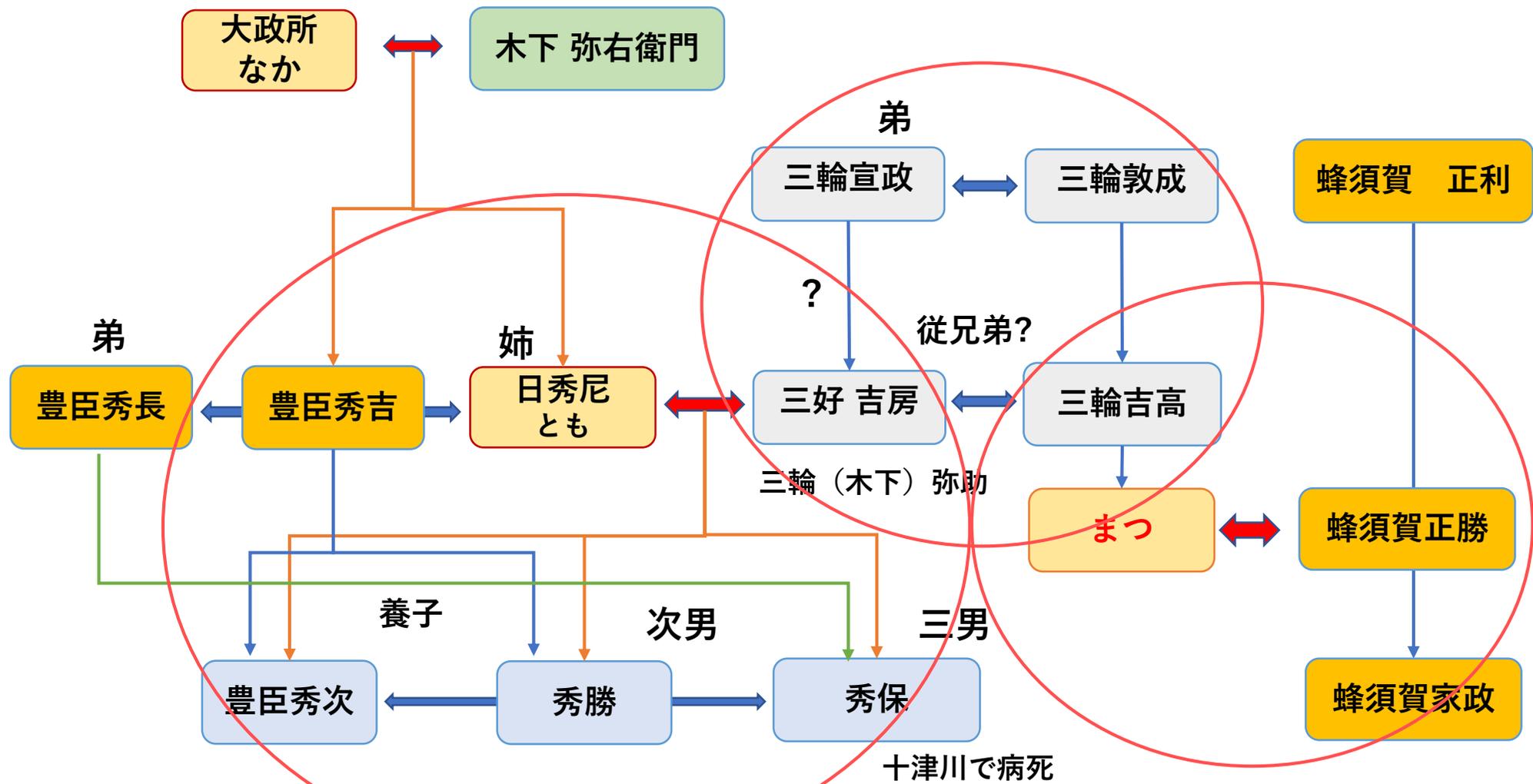
まつの父
 益田惣右門は尾州
 にて3千石を領す。
 益田藤右門は兄。
 嶋八左門は兄。
 内膳、宮内は弟。
 異兄に織田五郎左
 門（金吾）。

3000石と言われる
 益田庄が尾張の何処
 にも見受けられない
 のが不思議？

まつの父かもしれない「三輪吉高」とは

- 大和の大神神社主家は、大神姓で三輪氏であった。
- その祖は大国主命といい、大田々根子命の後裔と伝える。崇神朝に大神君姓を賜り、のちに三輪君に改め三輪氏を称するに至ったという。
- 以降は、嫡流は大神主として神事を務めたが、一族には武士となり、三好氏・北畠氏などに仕えている者もいた。
- 一説によると、まつは父の三輪吉高が北畠具教の家来であった事から、具教の側室となったとされている。ともりの
- また、吉高は犬山城主が織田信清の頃に、家老であったと言われている。
- 三輪吉高(秀次の父の三好吉房の義兄弟?)は、三好吉房を継いで文禄元年1592年犬山城主となったが、文禄4年の秀次事件で秀次に連座して三好吉房と共に失脚となった。
- 同時に正勝の義兄弟の前野長康は子の景定と共に自害を命じられた。

秀吉、三好吉房、三輪吉高



文禄元年(1592年)、三好吉房の後に三輪吉高が犬山城主となるが、秀次事件で共に失脚する

まつは、北畠 具教ともりのの側室？

- 『蜂須賀家記考異』に依ると、「まつ」は伊勢の国司 北畠具教の寵を得て側室となる。
- しかし、子(東嶽禪師)を妊った為、正妻北の方(六角定頼の娘)の恠気を避けて北畠具教の元を去り鈴鹿中河原関氏に依る。
- 弟の益田内膳等の取り計らいで天文22年(1553年)、15歳で28歳の蜂須賀正勝の正室となる。
- これから推測するとまつの生誕は1537年と言うことか。
- 明けて天文13年(1554年)東岳禪師、そして永禄元年(1558年)家政を宮後城で産む。
- 家政は、小さいときに三輪氏の旦那寺である曼陀羅寺山内の梅陽軒(現在の本誓院)へ預けられ、昌運上人を師と仰いで、学問修行に励んだ。
- 本誓院には、家政の位牌や当時の手習い机が保管されている。

正勝との慌ただしい結婚生活

- 正勝は齊藤道三亡き後、岩倉の織田信安に仕えたが、同年の浮野合戦で大敗した後は宮後に居を構え、生駒氏、前野将右衛門と共に信長、秀吉と主従の縁を結んだ。
- その後、正勝は秀吉と共に戦に明け暮れて各地を転戦し、ゆったりとした結婚生活とは無縁だったと思われる。長浜に居を構え、その後龍野城の城主となっても毛利攻めなどで忙しく、殆ど「まつ」とは一緒に過ごす時間はなかっただろう。
- 戦国武士の妻として「まつ」がどのような暮らしをし、戦国の世を駆け上っていく正勝を如何に支え、家政を育てたのだろうか。
- 天正13年家政が阿波藩藩主となった後、正勝が、大坂屋敷で余生を過ごした時には、やっと平和な夫婦生活を送ることが出来たのかもしれない。しかし、その平和な生活も長続きはせず正勝は天正14年労咳で没する。
- その後、「まつ」は徳島城に入り、子の家政とその妻「ひめ」そして孫の至鎮とその正室「氏姫」等と一緒に幸せな余生を過ごしたと思われる。
- そして慶長16年（1611年）大坂冬の陣の前に没。法名は大匠院殿光室玄圭大姉。

始めは、子の東岳禅師が住職を務める**福聚寺**に葬られたが、夫・**正勝の墓**とともに**興源寺**に移された。

元和 9 年（1623 年）勝浦郡宮井村（現在の徳島市多家良町）に大匠院の十三回忌に伴い息子・家政が**大匠寺**を創建した。現在でも荘厳な禅寺の大匠寺に念持仏である聖観音菩薩像と共に、位牌が祀られている。



また美馬市にある本楽寺の本堂（阿弥陀堂）にも大匠院の霊位が祀られている。

ちなみに、阿波九城の城代、益田宮内（一宮、鞆）、内膳（撫養）は「**まつ**」の兄弟だとされている。

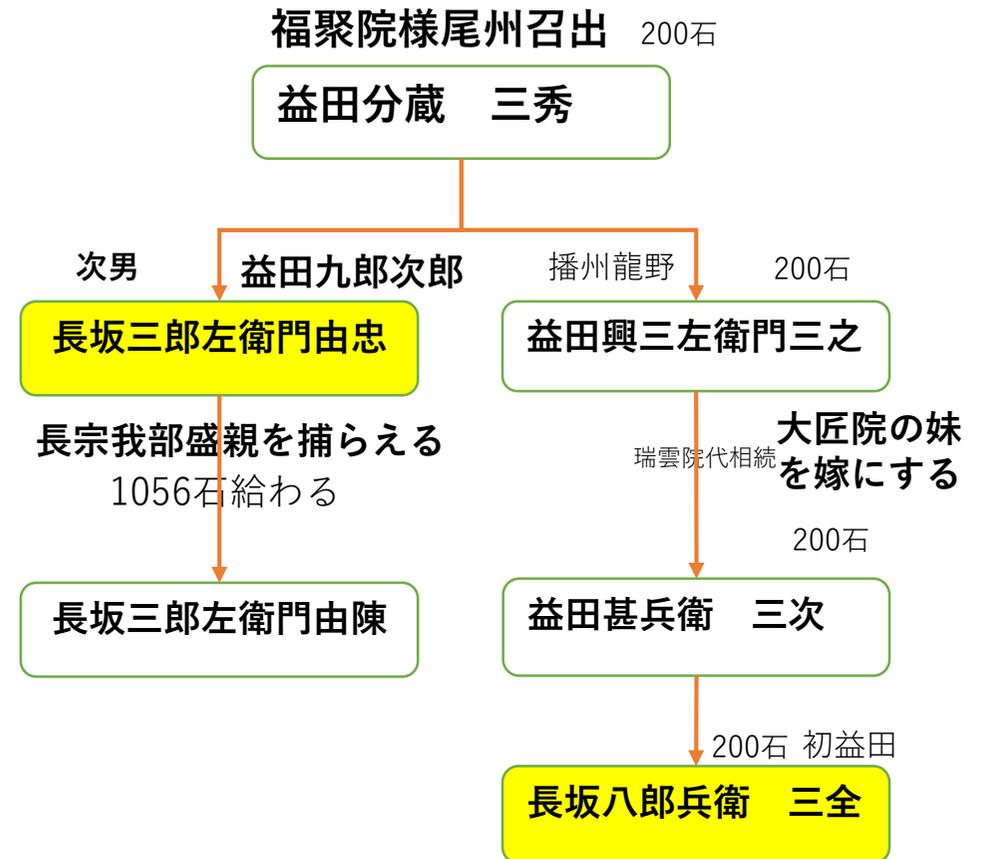
まつは三輪吉高の娘か？ 益田持正の娘か？ 私考

- まず第一の疑問は、**まつ**が**益田持正**(大永7年(1527年8月5日)に病死(益田氏系譜 仁尾内膳成立書 徳島大学所蔵))の女であるとすれば、**まつ**の生誕はそれよりも前となり正勝よりも年上となりありえない。
- 更に、益田持正が尾張に3000石を領したと言われる益田庄だが、清洲と蜂須賀邑の間に益田荘という小さな荘園がありはしたが、3000石と言えは300町位の領地が必要である。
- 尾張の古地図にも、そのような規模の益田庄の記載はない。
- **一宮城主 関長重**の息子**関長安**(成政)の一族が**真清田神社**の神官または**一宮城**の武士であり、地名である**真清田**を由来として「**益田**」を名乗っていたのではないだろうか。(真清田神社の社領は水田129町9反300歩)
- **三輪氏**は元は大和の大神神社の神官であり、子孫の**三輪吉高**は宮後八幡宮の社家であり北畠具教の家臣だったことも有る。

- まつは、尾張真清田荘の益田惣右衛門の女として生まれるが、宮ノ後八幡宮の社家であった三輪吉高の養女となったのではないか。
- たまたま三輪家を訪れた北畠具教に見初められて、北畠具教に仕えたと考えられる。
- 益田惣右衛門の先妻の子には持長がおり家督を継いだ。まつには腹違いの兄となる。
- まつの母は、まつの他に内膳、宮内そして三人の娘を生む。
- 益田惣右衛門と太郎右衛門との混乱が見られるが、大永7年に没したのは、まつの祖父の益田持正(太郎右衛門)ではないだろうか
- 身籠ったため、北畠家から追い出されたまつは、三輪氏の遠戚であり益田氏の主家でもある伊勢の関家に寓居する。
- そしてまつは、弟の内膳の計らいで正勝に嫁ぐ際に、実家の益田を名乗ったと思われる。

- 信長の伊勢攻めの後、伊勢の関一党は、次々と信長に降り、離散に追い込まれていった。
- また、長久手の戦いで関長安が死亡し、太閤検地のイザコザで真清田神社の神人が散逸した。その時益田氏も所領を失ったのではないか。
- まつの妹弟達は姉を頼りとして蜂須賀家の家臣となる。
- その後、益田宮内充一政や内膳は、四国攻めの後、家政が阿波に入った際に、まつの兄弟として蜂須賀家に召され、阿波九城の一宮城、撫養城の城代となる。
- また、別腹の兄持長の子、因幡は中老となる。
- 三輪氏が徳島藩で重用されていないのは、家政が阿波入国の頃、三輪吉高は秀次に仕え犬山城主となっていたので、一族は阿波には来なかったのではないかと思われる。

- また、気になるのは徳島藩士譜で一番古く正勝の家臣となり、福聚院様尾州召出しと記載されている益田文蔵三秀である。
- 三秀の嫡子、益田三郎左衛門三之はまつの妹と結婚し家政に仕える。
- 三秀の次男が大阪の陣で長宗我部盛親を捕らえた益田九郎次郎由忠であり、豊後事件の後、長坂三郎左衛門由忠と名を変えている。
- 同時に兄三之の孫である益田八郎兵衛三全も長坂に改名しているのはやはり豊後事件に依るものであろう。
- 益田分蔵と持正との関係が気になるところだ。



家政公 在位一六年

永禄元年(1558年) 蜂須賀ノ邑に生
母公益田氏 名小六 天正十年(1582年)25歳 婚姻す

同十二年三月 秀吉公より播州佐世郡の内細月利予両地にて禄三千石を賜う
同十三年四月 秀吉公四国征伐の時公は讃州志度ノ浦より攻入平均して阿州を賜

今春 秀吉公紀州根来征ス時 土州長宗我部元親使者信州の陣營に来正勝公取次也

而三月十一日 家政公阿州ニ来猪山ノ城ニ入程ナク大坂に帰り四月取入
始メ正勝公に可賜旨秀吉公命スと云トモ正勝公ノ願ニヨッテ家政公に賜也同
五月入国六月二十日朱印を賜名東郡富田ノ荘猪山の城に居す秀吉公の命ニテ
徳嶋と号ス

當城普請の内一宮の城に居

〇〇城ニ人数を入置 同年秋國中順見悉静謐ス 是ヨリ前祖谷仁宇ニ於テ郷
民共 代官兼松惣右エ門 梶浦与四郎ヲ殺ス 而右悪党を誅ス

脇ノ城ニ稲田修理 富岡に鹿島主水 仁宇城ニ山田織部 一ノ宮に中村右近後城番となる 西条に森監物同助兵衛久兵衛 川島に林図書 池田に牛田掃部同左京後中村右近 撫養に益田大善 鞆に大多和長右衛門代官を兼ねる 後中村右近又益田豊後守らしむ

同十四年正月二日従五位下阿波の守に任ス此の日至鎮公阿城ニ生ル

同年秀吉公洛ノ大仏殿再興に依って材木若干献ス
慶長四年勝浦郡中田村ニ於テ豊国の神社を造営有りて尊敬す その後破壊す 又彼邑に公の邸有

同五年石田逆乱ノ比大坂に在て甚危シ
而秀頼公へ阿国を返納し名蜂須賀彦右エ門秋長ト改八月暫泉州松尾に隠シ高野山に登り入奥坊と云又梅庵と云
然後阿州槇尾寺ニ至同九月八日大安寺泰雲和尚に命シテ剃髮名蓬庵と号

泉州牧野道通カ家ニ居公大田彦兵衛ヲ江戸に下し大坂の始末を上聞に達ス
秀頼公の命として小川越中守小早川豊前人数を率いて阿城を受時益田因幡守出迎 大匠院公阿城より富岡の城に退敬夫人此の時来大坂に有(中略)

蜂須賀 家政

永禄元年（1558年）、蜂須賀正勝の嫡男として、尾張国丹羽郡宮後村（現在の愛知県江南市）の宮後城に生まれる。織田信長、次いで羽柴秀吉に仕え、秀吉が織田信長の命令で行った中国毛利攻めには黄母衣衆として父と共に従軍した。

天正10年（1582年）、信長が本能寺の変で明智光秀に討たれると、秀吉に従って山崎の戦いに参加した。天正11年（1583年）の賤ヶ岳の戦いに参加し、天正12年（1584年）に播磨佐用郡内に3,000石を与えられた。

天正13年（1585年）の紀州征伐など、秀吉の天下統一における戦争に従軍し、戦功を挙げた。

雑賀攻めの後に行なわれた四国攻めでは、阿波木津城攻め、一宮城攻めなどで武功を挙げた。四国攻め後、その戦功により秀吉は正勝に対して阿波一国を与えようとしたが、正勝は秀吉の側近として仕える道を選んで辞退し、秀吉はやむなく家政に阿波を与えたという。こうして家政は天正14年（1586年）に阿波18万石の大名となり、同年1月2日、従五位下阿波守に叙任する。

四国攻め

阿陽記

長宗我部元親四国一円を領知せんと阿波国へ附入

太閤秀吉公、御退治として天正13年酉年春、羽柴美濃守秀長・三好孫七郎秀次御大将にて(中略)陸・船手より攻め寄給ふ。(中略)

陸地は蜂須賀正勝公先陣を蒙り給ひ、播州龍野をご出馬にて、同州田井島より御乗船にて讃州八島へ御着、阿波・讃岐の国界逢坂山の峠へ人数を揃、朝風に旗の手を靡かせ玉う。

お身付きの老従は、細山帯刀・益田宮内・山田八右衛門・益田内膳・長谷川孫右衛門尉

秀吉公御付進候人夫稲田太郎左衛門尉・牛田又左衛門尉・中村次郎左衛門・森五郎兵衛尉・樋口長左衛門尉・西尾理右衛門尉

此の外与力等数多、御身附の騎馬分の侍、御手勢都合壹万余騎、両御大将中国の軍勢三萬餘騎、正勝公・家政公先陣にて先東条関兵衛の居城木津城を責給ふ。(後略)

家政、ヒメを娶る

家政は長篠の戦いを経て、中国攻めの際、秀吉の旗本・黄母衣衆の一員となり、播磨広瀬城攻め、羽衣石城の救援などで活躍。

また天王山で光秀軍と戦った山崎の戦いにも家政は秀吉に同行し戦った。

その年、天正10年（1582年）に「ひめ」は20歳で26歳の蜂須賀家政の正室に迎えられる。

「生駒八右衛門家長女ヒメ天正10年尾州丹波郡小折村ヨリ播州龍野ノ城ニ輿入り」とある。

そしてその翌年天正11年には、家政は賤ヶ岳の戦いに参戦するなど、非常に慌ただしい中での婚姻であり新婚生活であった。

家政は武功により、天正12年（1584年）に播磨佐用郡内に3,000石を与えられ、その後、紀州征伐・四国征伐にも従軍、特に四国征伐では正勝と共に活躍する。

戦功により、正勝に代わって家政が阿波国17万5千石藩主となる。

家政の正室「ひめ」

- 「ひめ」は永禄6年（1563年）尾張の豪族小折城主生駒家長の女として生まれる。
- 織田信長の側室「吉乃」は家長の妹であり、「ひめ」の叔母となる。
- 生駒氏は藤原良房の子孫で、灰や油の商いと馬借で富を築き、小折城と呼ばれる家屋敷を構えた武家商人であり、秀吉や織田信長などが屋敷に出入りしていた。
- 正勝は川並衆として生駒家の物資の運輸の警護などをしていたとも言われている。（荏胡麻油を飛騨へと運び、帰りに草木の灰を仕入れてくる。草木灰は肥料になるとともに草木染めの触媒となる）
- また、正勝の兄の八右衛門が生駒家の女の婿養子となって生駒家の商売を継いだとの説もある。
- その生駒家でその名の通り「姫」として大事に育てられた「ひめ」がどの様にして家政に嫁いだのか。

長男・蜂須賀至鎮を出産

- 天正13年家政と共に阿波国に入った「ひめ」は天正14年（1586年）阿波一宮城で家政との間に長男・蜂須賀至鎮を出産する。
- （実は家政はその前に側室との間に兼姫をもうけている。）
- その後、家政は側室との間に三人の姫（万、阿喜、辰）をもうける。
- ひめは慶長11年（1606年）没する。享年43歳。法名は慈光院殿松嶺玄寿大姉。
- 義母のまつ（慶長16年（1611年）没）より早く亡くなった事になる。
- 慈光院の没後、弟の生駒善長は家政の家来になり、中老阿波生駒氏として明治維新まで蜂須賀家に仕えることとなる。
- 墓所は福島にある慈光寺。
- この慈光寺は息子である至鎮が八万町中津浦に創建したが、母の死を期に寺を現在地に移設し慈光寺と名を改めた。

- 家政は天正15年（1587年）、九州征伐に参加し、日向高城攻めで功を挙げる。天正18年（1590年）の小田原征伐における伊豆韮山城攻めでは福島正則と共に先鋒を務め、武功を挙げた。
- 文禄元年（1592年）からの朝鮮出兵には、文禄の役・慶長の役の2度とも出陣する。特に慶長2年（1597年）の南原城の戦い、蔚山城の戦いでは救援軍の一端を担い、浅野幸長を助け出すという武功を挙げた。
- ところが、家政たちが十分な追撃を行わず、さらにこの後、黒田長政ら諸大名と連名で本土に戦線縮小案を上申したことが、**秀吉の逆鱗**に触れる。（石田三成の策略?）
- 家政は本土に呼び戻され、領国での蟄居と蔵入地の没収?という**処罰**を受けた。
- この事が後に、関ヶ原の戦いで西軍に付かなかった大きな理由となったと言われている。

糸姫

黒田筑前守長政室 元龜二年尾州に生 天正八年婚姻す
子の時長政公播州に住す 後離別阿州に帰 西郭に住 後出来島に居
今松倉屋敷也

正保二年六月廿日逝 享年七十五 寶珠院殿桃溪僊公尼大姉と号。

桃溪山臨江寺葬

蜂須賀・黒田両家は享保12年（1727年）、蜂須賀綱矩・黒田宣政の代に和解した。

東嶽和尚

正勝侯の養君 その氏を不知 普門西堂福聚寺の住職 後名東郡下八万村雲水庵
に隠居 寛永十一年十二月四日寂享年八十 普門興源開山東岳西堂禅師と号 其
の地に葬

興源寺 本江岸山福聚寺と号して徳嶋の郭内に有 今の北倉の地なり 慶長六年
今の岡の地に移り忠英公の時慶安三年大雄山興源寺と改

東嶽は、正勝の正妻大匠院の連れ子で伊勢の国司北畠 具教の落胤と言われる。
家政が生まれたため出家し、南禅寺で修行。臨濟宗の僧侶となる。
黒衣の宰相として有名。

八万町中津浦の雲水庵跡には東嶽禅師及び蜂須賀家老の池田家歴代の墓標が残されている。

関ヶ原後の家政

大坂の下知国役として**稲田修理 長谷川伊豆**人数を率いて 九月十二日
摂州兵庫に至り加州大聖寺ニ至ントスル処 関ヶ原御勝利に依テ江州草
津の駅に至り至鎮公を迎奉ル

十一月 至鎮公阿州を拝受有りて帰国する
(中略)

至鎮公 淡州拝受ノ奉謝トシ同年東行ス

元和六年台命有りて**忠英公の後見**ス

公諱多し招雪 **一茂** 政家 可慶 茂成 後家政と云う慶長の頃 比一
化斎 又寛永の頃 宗一と云い

退居の後モ懇篤ニテ度々江戸に赴き
寛永十五年十二月晦日阿城西郭ニ於いて逝ス
享年八十一
瑞雲院殿蓬庵常仙大居士と号興源寺に浄ス

寛永十六年正月六日 渋谷安太夫歿死ス



宮後八幡社



曼荼羅寺

家政が老境に達した頃、故郷宮後の地が忘れ難く、幼少期にこの地に住んだ縁により、寛永元年(1624)に宮後の八幡社と常蓮寺、曼陀羅寺の塔頭・本誓院を修復寄進。

八幡社本殿落成の祝賀のために、参勤交代の折に、家臣の稲田、生駒、前野の3人を宮後村へ立ち寄らせる。

その後、寛永9年(1632)家政が75歳のとき、曼陀羅寺の正堂を京都御所の紫宸殿の古式にのっとり修復寄進する。

家政は、寛永15年(1638)81歳で逝去。法名は瑞雲院殿蓬庵仙居士。

参考資料

1. 蜂須賀家記 岡田鴨里 明治9年
2. 尾張群書系凶部集
3. 寛政重修諸家家譜
4. 武功夜話
5. 史伝 蜂須賀小六正勝 牛田義文
6. 蜂須賀家系図 森本文庫
7. 蜂須賀家家臣団家譜史料データベース 徳島大学附属図書館
8. 徳島藩士譜 宮本 武史／編 -- 徳島藩士譜刊行会 - 1972
9. 蜂須賀御系図 徳島県立図書館
10. 訳注 阿淡藩翰譜 徳島藩・上級家臣録 牛田義文
11. 蓬庵公 呉郷文庫本 小出植男 /編
12. 蜂須賀蓬庵 徳島県 1914年
13. 蜂須賀三代正勝・家政・至鎮 二五万石の礎 特別展 徳島市立徳島城博物館／編
14. 蜂須賀小六正勝 渡辺 世祐／著 -- 雄山閣 - 1929
15. 阿淡年表秘録



蜂須賀家 家系図

